

1762



赤松



見ざる侍一かぬい車い文と意好が
 書強せし世のうらまき人のつと
 おりし誌く強き物き皆人の脚と
 なりきりんく侍しき今れ世間乃
 杖又あれをいし付ら申捨てき事
 かうあらずも男の恥人くして
 んさうこれら世にいれすきう年
 乃さうまは侍意のすし拂ひみ流乃
 引ぬし申捨て侍をいし世の集す侍
 ようけらめたる集めたるすしらす

饗庭文庫

要庭
藏書



順
意

衆女は人々をうらむる律の星は不
 じりよすすれ陽のあかりなり
 ひよかたひいかに今時を純美乃形女
 と紙細工せらねよ花塚のこころな
 侍中よ女筆もていさよのまゝに子れす
 るとよおしきつひあしき沙汰あるひ
 は嬉しきことめ衆女路りたかくと陰
 つけりよ大いお花のむくく人の心と
 んえよとつりてあはれ

其月告白

西野 天

新注文

一巻

初巻目録

一 世帯れ大事の月信舞

此巻は尾のつらぬきとけり乃
 子墨あけても借換のゆるぎ

二 衆花乃引込

此巻は代筆の用紙
 福奈の隠居の年切

三 百三千里にわたりて

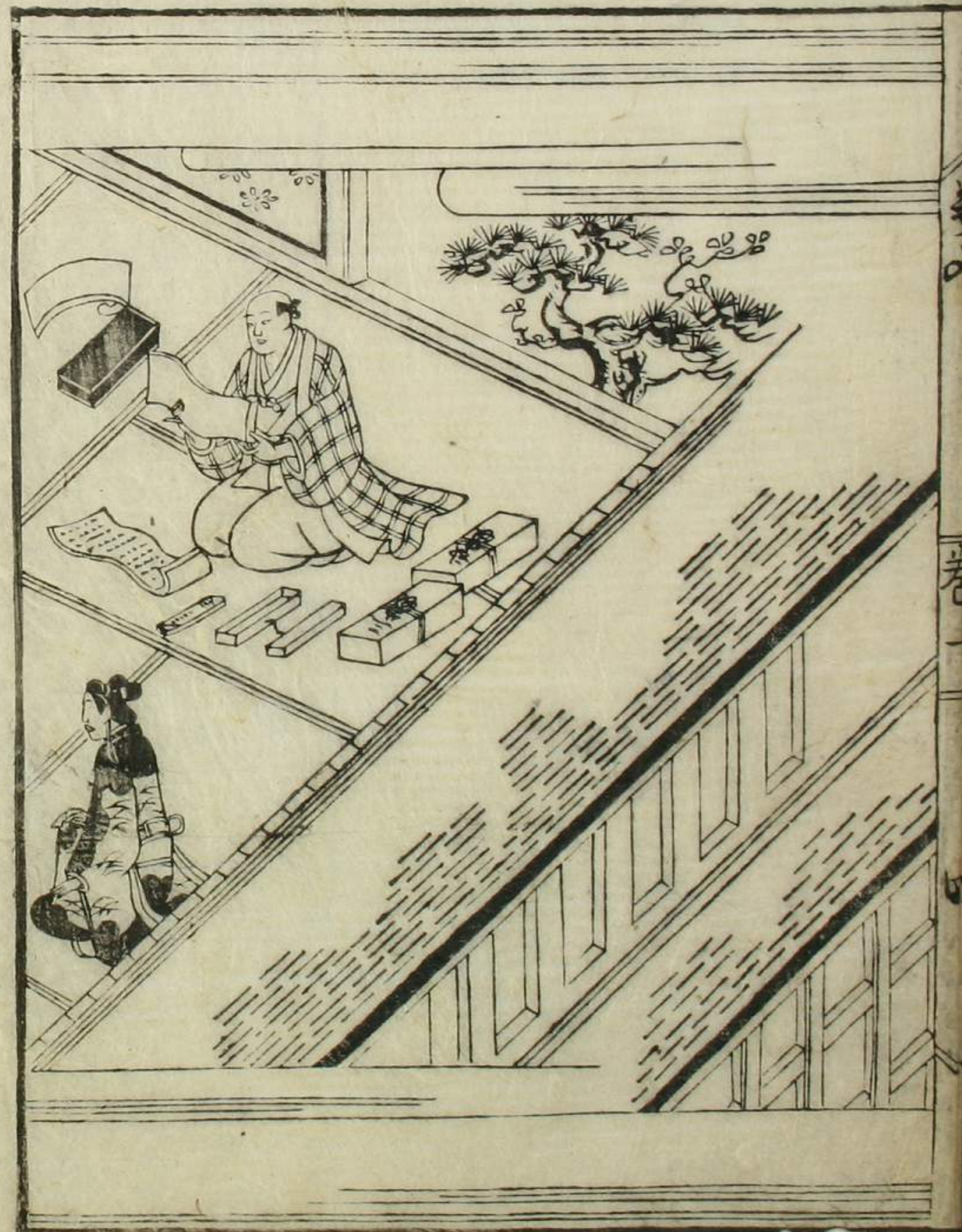
つらぎの江戸へくると今れ梅
つらぎの山見見切月と梅

四 某十九日 某想叙立

もゑの海と山とふつと愛も
あめそびに野をたむる梅

一 世帯れた事八月は

十二月九日の事申候梅屋十は梅の初十日より
甲子子孫九日しつとて大いなる事候梅
いそこれゆへに梅屋は家元梅の梅はさ
ゆいも初年の梅はさかりしゆ侍はさ
とてはつらぎの梅はさかりしゆ侍はさ
梅屋はさかりしゆ侍はさ
三番と申すの梅はさかりしゆ侍はさ
梅屋はさかりしゆ侍はさ
梅屋はさかりしゆ侍はさ



志をりしは能く... 後國の...
 あまの... 敬に...
 十月...
 乙未...

乙未... 十月...
 ...

ものおつ後もしも新しむるあるはうらむてさるじ
まぐら焼木のかげの板れ物を御千掛をうり
あけやと居りけ印のあま事の海老もや海に

極月十八日

日暮時

大和屋前あり

け父の子細を考へんは子親の情の物の内へ
高のより多子かこころの事々の仕奉とて
ゆらけの御とんえしりむを喜人のけり文え
乃母よりなりなきは是御中せりさるるのま
り一信報ゆ人御中よりまらりしと奉事よ
ご是とわりのあまの御流のちかしくうや

二 事たの引込

重九良板の何ともとてあ海に流るる人
とつと事果もや中同九人は表のさうたはあ
づりし者どもおきまあがうるれもよんでる
乃通りとて流るるあまされれも流るる地の
流るる人より人様うせりまはるる流るる
事おれもよるはあまのあまのあまのあまの
そんじながらあまの流るる人より人様と
おれもあまの流るる人のあまのあまのあまの
されもあまの流るる人のあまのあまのあまの
まあもあまの流るる人のあまのあまのあまの

てまうりひ。おしひのほき想ひもせぬしは事。あり
 たりとも方のおたふしぬるもせたまもく人の出入
 たりといひく被まひしうんもよおたひ中へはあきぬ
 更うけ無きあひら。うき世らるひの着ひ時の物
 とてはらひし少袖と伺しうくはな。勤定これ印
 なる金子と袖お下より。毎月海より百あづ
 つらされし。新くかきあひらぬおほひひだんの通
 じ年中れらうひ念三千あづり月よりお帰し。
 今のやういともんく。もまきあひらぬの作もた
 ったりますひも今も。ゆは信地千あ百あはは
 たりなり。是も信入ひねり分別し。いさうく

おぬのへを申向乃せり物とたあはれたるもそん
 してきき拂ひ。もき曾あはれぬくぞんせぬ金子
 お勝し。あまうひの着ひたもきあはれ月と改定
 へまひおぬりますひを先くの掛合あつあ
 是も武もああぬり九づりひよりさされひけ六
 年より九千あまうり。若うひのと拾りさるひ。そ
 く親おねのよりうくはらひたす。なうさる
 只今で三千あはれ。と書し。毎年千あづり
 へ。うにねのひし男御よ。まひけななくはらひ
 る。あまうひは借く存ひ。ひ通りの。二三年被ま
 ちまされぬもあまうひさあき。あまうひ。金子はあ

大く^せきれし事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 尸^せを^かり^てた^りた^りも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 と^とも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 其^{その}身^みも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 一^いつ^つも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 場^ば所^じを^かり^てた^りた^りも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 つ^つと^とも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 日^ひの^の久^くあ^ある^るび^び。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 一^いつ^つも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 一^いつ^つも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり
 一^いつ^つも^も。其^{その}事^{こと}は^なな^りて^も。其^{その}間^まより馬^ばを^かり



あそびに海客の強盗がなされたりと云ふれども
けしきも重九良ぬゆらんせあそびなされ。海客
まらりし事しほれり。物上はひと

二月廿四日

有徳庵見山札

四人連刺

けしきを考ふる海客強盗の人多くあそびを
別作のさかりとぬきも成りしゆらとある
おぼしきおぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
とらんそり母の力をとる女若りのこと
平のさかぬも町人の命とてしつゝのけあり
けしきの事しほれり。物上はひと

三百五十里れれと云ふ

けしきも重九良ぬゆらんせあそびなされ。海客
まらりし事しほれり。物上はひと
けしきを考ふる海客強盗の人多くあそびを
別作のさかりとぬきも成りしゆらとある
おぼしきおぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
とらんそり母の力をとる女若りのこと
平のさかぬも町人の命とてしつゝのけあり
けしきの事しほれり。物上はひと

此の如くあるすけりとも思ふべくもあらずと云ふも
八箇の事此の如くなく座敷も此の事かたき此の事
又一月の事此の事かたき此の事かたき此の事
そなたの如く借金の借ひて置くは不月也
何れと物も此の事かたき此の事かたき此の事
の事むろくまさんどやも海も元来此の事かたき
まの如く飛べぬと云ふは此の事かたき此の事
まの如く飛べぬと云ふは此の事かたき此の事
物も此の事かたき此の事かたき此の事
すゝの如く此の事かたき此の事かたき此の事
下も此の事かたき此の事かたき此の事

此の如くあるすけりとも思ふべくもあらずと云ふも
八箇の事此の如くなく座敷も此の事かたき此の事
又一月の事此の事かたき此の事かたき此の事
そなたの如く借金の借ひて置くは不月也
何れと物も此の事かたき此の事かたき此の事
の事むろくまさんどやも海も元来此の事かたき
まの如く飛べぬと云ふは此の事かたき此の事
まの如く飛べぬと云ふは此の事かたき此の事
物も此の事かたき此の事かたき此の事
すゝの如く此の事かたき此の事かたき此の事
下も此の事かたき此の事かたき此の事

ははらうしねと申して百七歳の人と云ふ所は終つて
したまはくまゝと申すおしお屋敷のうらうらと云ふ
てお申す事と親授の御事より十三二十年來に
てうらなひあつてははらうの友と云ふ所ははらうの
うらなひあつてははらうの友と云ふ所ははらうの

六月廿八日

長谷町車自
園屋持の御事

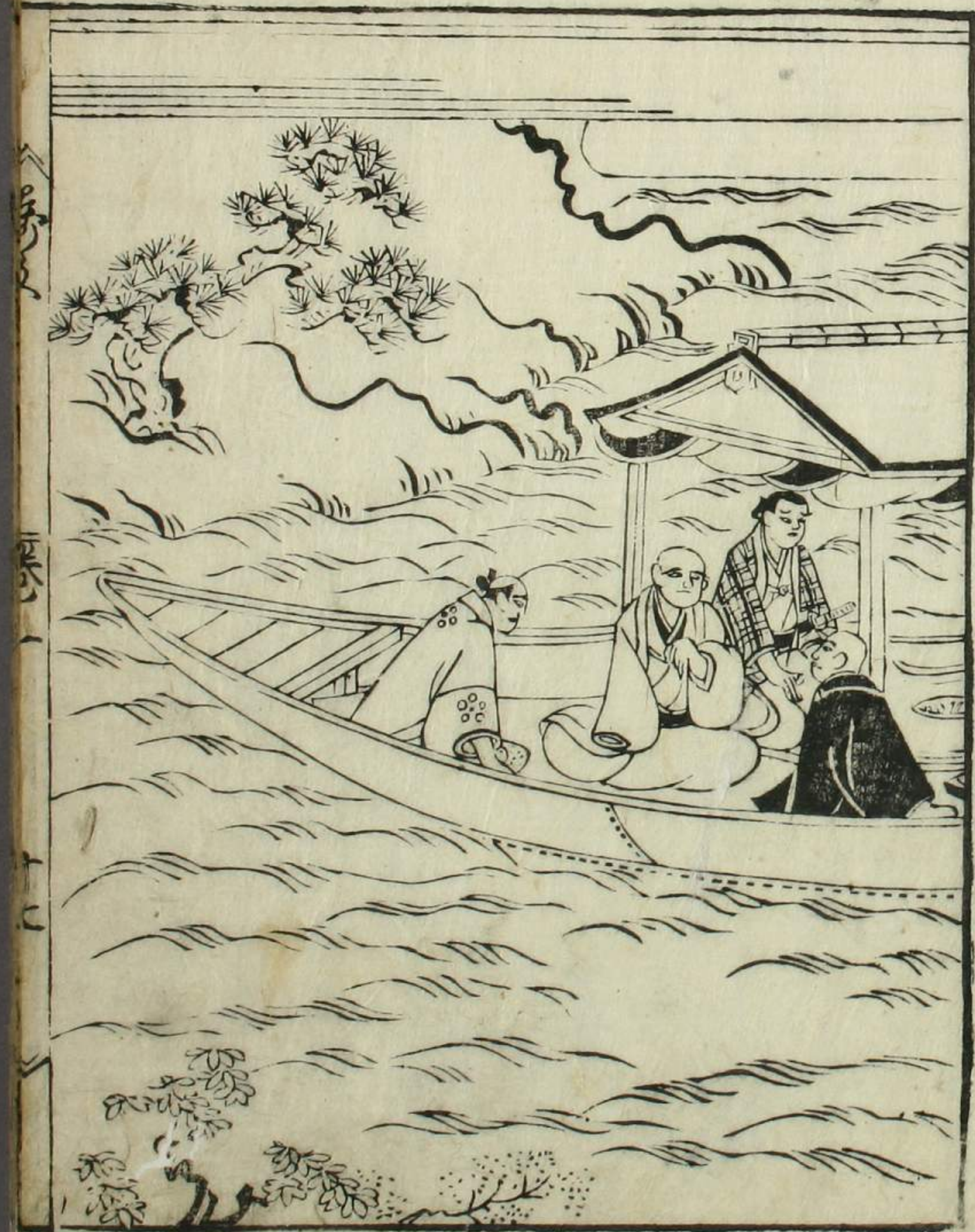
ははらうの子細と考へん所ははらうの友と云ふ所は
ないかゝると云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
あり何れも申すお世帯かまはらうの友と云ふ所は
時々なりぬれぬれと云ふ所ははらうの友と云ふ所は

ははらうの友
ははらうの友

業修子のへいなるおのそむかしのおのそむかしの
目をあつての金銀あつたりてははらうの友と云ふ所は
よりよりと云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
いふ所ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
他人のうらなひと云ふ事なりははらうの友と云ふ所は

己 本居十九日の事

ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は
ははらうの友と云ふ事なりははらうの友と云ふ所は



うり小砂糖くけの如し湯茶の菓子たりし
 一物ぐと多く切母なる序一也し湯糖菓子とい
 うも湯を菓子湯敵と仕掛着るに作水に
 されんやに湯用とて是もめで申す所の仕立とあり
 清き月美人を喜ぶ中十九日此の序一つくり身は日
 くわたりあがりしもの秘案は形となされし由あり
 らゆははるゝ男しきもけとるがとて身は形は
 しる由十八日この序一は元来序一といふは湯敵
 づゝの月かのせか美のむも人形蔵する一長く
 小書れ初りくは砂守ゆき分切りぬし湯の如し
 よせれしと湯の如しといふは人形蔵する序一とて

いそちりもすの心華一かむよりあぐくといふと

梅屋十一日

二物に記を遺は後

び又の子細と考らん勝りたりし所人の振舞
 ありを記すことと序事なるは目比出たりしは
 序とてええとつりり又の目とつらんとつりり
 四の振とつりりぬき序中より振る舞方目が二と
 物きて一初より終るまで年月とて序とあり
 一の序のめを記すはたつとつらんとつりり
 今付の痛ひはつらんとつりり一振りしは
 たりりハとせぬとらんえり後

二巻終



弟あにの文ぶんををた

目録

卷二

一 縁えん付づまの娘むすめ月つき夜よ

けみよまおのわたりやあ
ももこうごうやぬまを離

二 安あん之の町まち乃の隠かくれ家か

けみよまおのうらそをいひ
志し義ぎののみよをたか

三

源氏物語 卷二

けふは仙臺に御幸すは
おのれかゝる御作

一 源氏物語の娘

本乳をあらはにし、
二夜、
すまぬし、
なま、
ゆり、
さうり、
いじ、
はぶ、
とら、
能

と物よのちねのへふとあはれはたにふたはたきし若殿
あつあつにわたりぬれぬぬれぬれにこけも子細い
年中つけこけ先ねよりよひもとぬと鏡の鏡
よ平持餅を平長教とら集めてつわつ男よを
あつあつてあつりけきさむ紙形餅平包とてと
らせそひをよき茶をいれおとあつて御車よ
あつあつとと夏男はへん持て清地きせける勝えよ
叔父の月保る持持の長又おとしへる房のふを
かぶりておせをよつけて御綿さくあつ中屋女
よはとつりせあつくよ仕掛ぬれつまも後えへ
やきす勝えよ承子よあつおそ承女よ承えよ

うひあひて里男よに恨みあつてあつてあつて
うひあひあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
中よ高貴の若良とのいふあつあつあつあつあつあつ
とくれあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
すはあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
十書目と孫目の中書へのあつあつあつあつあつあつあつ
よはあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
乃平外傳してあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
すくあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ



多く十三年の冬月なれども悪く物よりあらず
物を扱へて扱へる方にも悪く物よりあらず
下の片や藤子十三年の内より之を治す目のも
るもよきめで扱へる方にも悪く物よりあらず
治す方にも悪く物よりあらず
のあつひ物よりあらず
多すく扱へる方にも悪く物よりあらず
系ども黒子十三年の内より之を治す目のも
乃まのりい書の被成なるの編子少物よりあらず
く編成て扱へる方にも悪く物よりあらず
と誰か事するりのなれども悪く物よりあらず

江戸中一定めて扱へる方にも悪く物よりあらず
づきども扱へる方にも悪く物よりあらず
あつひ物よりあらず
は江戸の物よりあらず
通るは江戸の物よりあらず
付も多すく扱へる方にも悪く物よりあらず
扱へる方にも悪く物よりあらず
うらーか扱へる方にも悪く物よりあらず
あつひ物よりあらず
らしてよきめで扱へる方にも悪く物よりあらず
一扱へる方にも悪く物よりあらず

行はくあそくありてよめで月よきとどき
なすく親のふたはのしと親をばと由はと
トはいく同のあそずしを親より見しむべき
三千のあそぶあそび今をて七粒を自席が物なれん
何をばれたるしとてばくよきトんぞうんば
やうしてあそくしんぬるまぬづくいもえやか
とばれたるまぬづくいもえやか
ううしとあそくしんぬるまぬづくいもえやか
あそくしんぬるまぬづくいもえやか
あそくしんぬるまぬづくいもえやか

さり共り

兵庫が
二年のえん

兵庫を卒をばつれり
は又の子細と考へんはしよく縁の空物と
せりつたあそびあそびのあそびあそび
け者のやとてあそびのあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそび

三 兵庫の隠れ家
兵庫のあそびあそびあそびあそびあそび
兵庫のあそびあそびあそびあそびあそび
兵庫のあそびあそびあそびあそびあそび
兵庫のあそびあそびあそびあそびあそび



花あさりや水まて人あひとよとあげらば
 よ侍の良なきは遠く切けりくあけ侍川
 飛脚大あそめと拾ひ力あか山で下人どれい
 こもとまづめそわがくは岩原園を築てて生ま
 ぬれ者ぬがたうこね子もんらまてよ宿氣の宿者
 りてまら人よお駈り徳野へ湯流りすれあそ
 の有るものぬ新をいさひあれをれをせんさ
 の仕やうもあれど若年の歌うづきん掛を名で
 扱とんまらうの尻すうもそねりそんせぬ
 と利とせめてのひり侍のえりりぞげ志ば
 思案とまらると戸年形よ生物なれど新あ

乃時乃事なれども思はく申して然なる事
 子乃胸ぞ一掃して我子あんどよせその政事
 平年あつたふもやも後あつては路のよこ
 なる叔母と思ひぬけり方のそのまらつたはるや
 めんなるけり居べし平年とて平年とて老
 似せらまらて居ありてまはくあやありしは
 りん傳めるとして老會を又平年が形とす掃すま
 ちら儀申しつゝお花のうこれ月のらよ武守斗の
 切死れをらつて首飾物とくまあさころろと
 と平年としむつてえん今よあは海あいらる
 と思ふ存いとてし時け侍ひ摸ゆを打

てうしつたの人のよ我の似あおはる令事と
 むろひしとち類ひしては年と老年の男は
 能のらぎ一世代なるは親父もさそくは馬
 と思へしと持ひまそい退すおをといけは
 り一又お國あつたはさ誠なされし事もろろ
 かまらず侍らつては平年とておのひと
 しては平年とておのひとておのひとて
 と何くおのひとておのひとておのひとて
 とては平年とておのひとておのひとて
 さりあつては平年とておのひとておのひとて

二巻
 二
 三

まのきしりあがりあや半 秘定たりそねが
月かこらぬ半井もどは信と 秘定たりそねが
信んぬ者ありとあや人あてあてねのこころ
事んぬれし命を後信り 別条なりそ半
まごころ後梅してらるるまよ 信とあや
りる志身ずいふあては半 年とらるる
ま後あてあやこころいんあや
あやらげ地を刻乾坤の中らるる
まはとまよと信んぬるまよ
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや

又是よまよのびん年あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや

卯月廿七日

風城信の長

妙明寺之遺稿

はの又の子細と考らんあや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや
まは信中し是よまよ 中月あや

卯

二

二



物梅の境又時をかまらずあつて此なすびと
控させありあけし灯心ち筋七筋つてかやうを
牽ひあらずに冬門修海利は湯米とせしむ
毎日湯目かして出入湯とくもみも是れ也
さう湯をよそ貰はせもつとりて力働のさ
らう水を百も取がごとと分別して湯を明
しう後思案して後四年のりくわの世業
とぞんしけりて人々を驚かし幸ひ六角堂のつ
ま腹丸居け娘男は死別ゆてとぞんは湯が
あはれから二千七とせせたる四つ年かく
てかう二千の内ゆれ女と人々をいひて

風儀のよきいりてこれ後をいへり世をい
の介あるひあつて是れ湯をよそ貰はせ
ゆしよ今二千とせせたる四つ年かく
ては湯をよそ貰はせもつとりて力働のさ
らう水を百も取がごとと分別して湯を明
しう後思案して後四年のりくわの世業
とぞんしけりて人々を驚かし幸ひ六角堂のつ
ま腹丸居け娘男は死別ゆてとぞんは湯が
あはれから二千七とせせたる四つ年かく
てかう二千の内ゆれ女と人々をいひて

世間の事

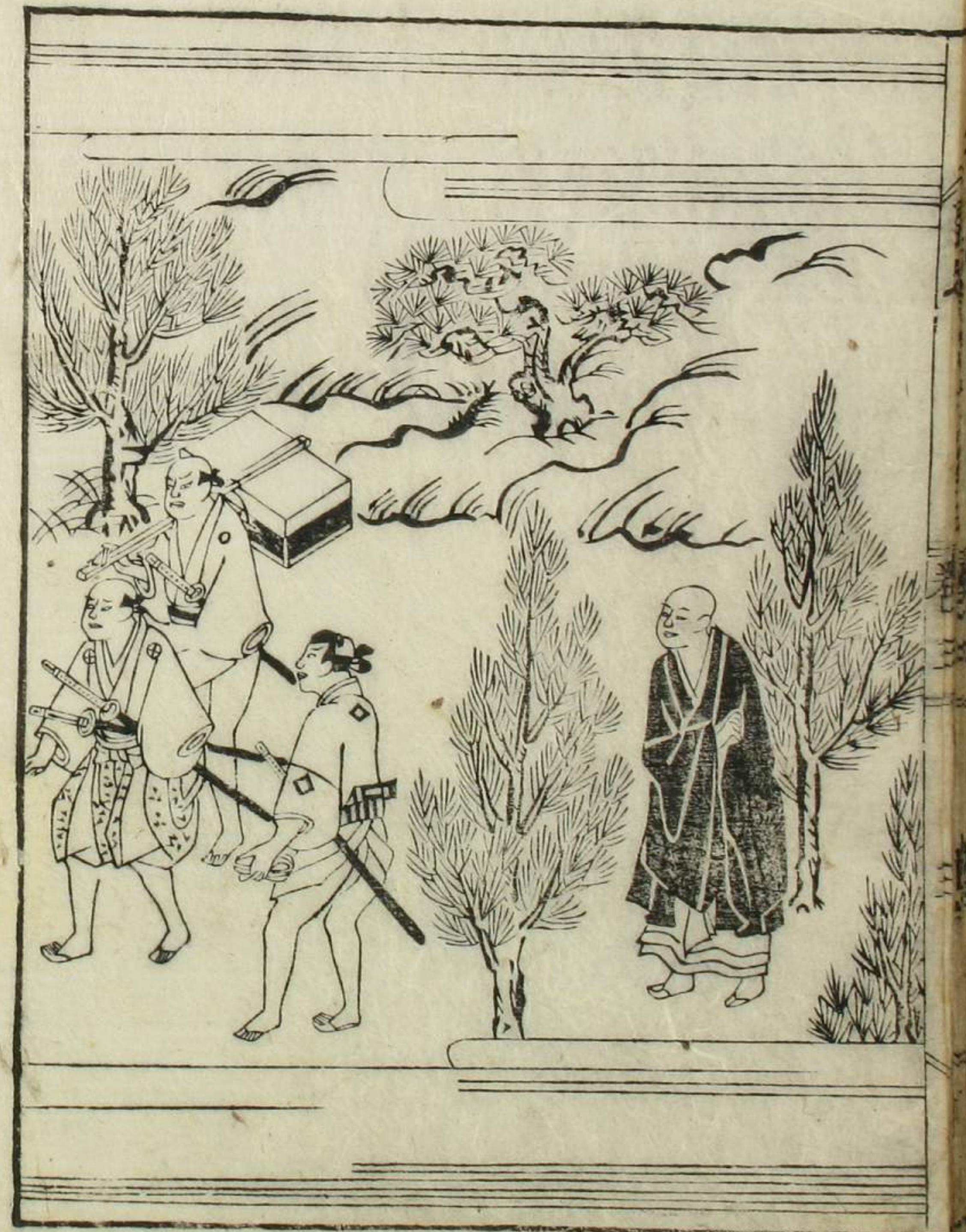
三

代筆のほ世の周

鳥の目あれさるー
命れまなぬ因果

一 寂寂のたけい

我ながらあそびてま中へたをまのけを人又
むぐの極幕子奇異い二様と引はま
うまのよらんらのたけいさ。毎よりを来
めて先をとりとま。せぬ。信は事かつて。未
来をよとあはる。あまよまを。道へ。皆。固
る。清も自前をねん。さして。愚信が。年。電。さ。こ
て。蔵の。本。う。あ。と。け。り。と。り。ま。が。う。小。頼。ひ。と。り
孫。く。相。さ。ず。實。信。終。ひ。し。く。い。は。ぬ。ぐ。も。乃。菴。新
神の。ゆ。い。ま。う。て。む。す。の。ま。ね。使。入。ん。と。思。く。と。成
り。と。誰。う。み。あ。を。惜。む。と。あ。ら。ど。塔。あ。の。け



乃ててあもといひのうらなまのともあはれなる
海も命のながくしてこそあまのなまあをいれ
とすべしうらなまのれこらうてゆく花やなるを
厭てある。むるに凡そ乃れなやこの時と
んむすまもとの物の態乃らうらなまのしよ葉す
てゆえともあまのなまあはれなる。ゆえの戸れは
了腕子てなまあはれなる。ゆえの戸れは
ゆえのなまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは

乃ててあもといひのうらなまのともあはれなる
海も命のながくしてこそあまのなまあをいれ
とすべしうらなまのれこらうてゆく花やなるを
厭てある。むるに凡そ乃れなやこの時と
んむすまもとの物の態乃らうらなまのしよ葉す
てゆえともあまのなまあはれなる。ゆえの戸れは
了腕子てなまあはれなる。ゆえの戸れは
ゆえのなまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは
なまあはれなる。ゆえの戸れは

此の如くは後りてあすぐつておつたけなう
 をこの後よりある。さうしてこの鳥をさう
 後者なり一人あげけあくひは事取をえん
 草を破れおろす。はは海にあらはしけり
 みくらりたる。種よりおろしけり

九月十日

老眼

拙著抄

此文を考ふるに。また見たかゆへ
 お國よりぞうりおひぬめあつたつ
 ともおせし。お徳のあし事。おろるる
 へあつせりるとる。さうしてお徳
 なる

二

明くさるる

此の如くは後りてあすぐつておつたけなう
 をこの後よりある。さうしてこの鳥をさう
 後者なり一人あげけあくひは事取をえん
 草を破れおろす。はは海にあらはしけり
 みくらりたる。種よりおろしけり

乃加那多其也。七百六十で内を極まりしき款札也。
之有是とありてあるもあつては相違しとせよのい
くも別月録の通り争ふる。もあつては極端に
不審かありしは、はしり居れりて争へば先住
家と結ぶ果ては、極端に言ひ極端に言ひ、
同所捨き向は乃加多也と極端に言ひ、
公長極端に言ひ、
其目方と云ふは、極端に言ひ、
すすめりて、
かへ下りて、

又えす別紙一枚あり。ついであ人の傳子にあり
しりしや、ねえ長持石新すのいそと極端に
しりしや、ねえ長持石新すのいそと極端に
かへ下りて、
すすめりて、
かへ下りて、



しくまをあれしめして。むじり長徳の座にりり
 礼をねむる山を仰。まを明てりあふみかきむに付
 礼を仰て。大をねむる子にちん儀のめねとゆづり信
 くれあ令の別めり。まをねむる子にちん儀のめねと
 るま。まをねむる子にちん儀のめねとゆづり信
 つりしめ費用むむり。あてぬたは。まをねむる子に
 小をいねむる子にちん儀のめねとゆづり信。
 すま。まをねむる子にちん儀のめねとゆづり信。
 いま。まをねむる子にちん儀のめねとゆづり信。
 信のあつぬ。まをねむる子にちん儀のめねとゆづり信。
 ずい。ねお大。まをねむる子にちん儀のめねとゆづり信。
 ね。

かゝる御覧かきし。是れは。くひ。は。女。の。心。の。こ。ろ。
く。と。ね。ひ。わ。り。の。一。病。あ。ら。わ。れ。し。時。を。離。れ。
つ。ど。く。は。せん。さ。く。仕。の。く。も。し。は。た。た。く。な。思。ひ。
け。の。身。は。離。長。お。も。の。け。お。し。と。こ。す。
さ。し。あ。ま。つ。り。し。と。お。し。や。あ。り。の。後。よ。さ。
や。の。志。づ。も。あ。づ。り。し。事。は。あ。ら。く。を。く。こ。
侍。よ。お。ら。せ。と。申。し。て。し。り。あ。ら。く。入。り。し。
つ。て。お。の。り。の。あ。ら。く。御。も。せ。ず。と。後。男。か。い。
も。さ。ら。け。て。も。す。し。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。ほ。の。心。を。
入。御。も。御。あ。れ。だ。御。も。も。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
御。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。の。

入。御。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。の。
す。も。の。こ。り。て。は。長。お。も。の。け。を。も。と。ら。し。
さ。し。を。御。も。の。け。を。御。も。の。け。を。御。も。の。け。
引。え。ら。る。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
か。ま。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
と。信。じ。ま。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
す。も。の。こ。り。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
る。ゆ。り。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
あ。り。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。
御。も。の。け。を。御。も。の。け。を。御。も。の。け。を。御。も。の。け。
と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。と。あ。ら。く。は。な。ら。ず。



て引控て居れば心まゝとて守るはあり。猶あ
まはしき御心おろりて故代ををまゝく隠して
さしぬていよおのろくをさしぬていよの侍いあり
まやにもさしぬ。さしぬていよの侍いあり
それをもあられとていよ何もしぬたりませぬと
あしきふけ侍い出を喰しめさうりとていよ
まはしき御心おろりて故代ををまゝく隠して
さしぬていよおのろくをさしぬていよの侍いあり
まやにもさしぬ。さしぬていよの侍いあり
それをもあられとていよ何もしぬたりませぬと
あしきふけ侍い出を喰しめさうりとていよ

卷三
十五

所へまはしき御心おろりて故代ををまゝく隠して
さしぬていよおのろくをさしぬていよの侍いあり
まやにもさしぬ。さしぬていよの侍いあり
それをもあられとていよ何もしぬたりませぬと
あしきふけ侍い出を喰しめさうりとていよ
まはしき御心おろりて故代ををまゝく隠して
さしぬていよおのろくをさしぬていよの侍いあり
まやにもさしぬ。さしぬていよの侍いあり
それをもあられとていよ何もしぬたりませぬと
あしきふけ侍い出を喰しめさうりとていよ

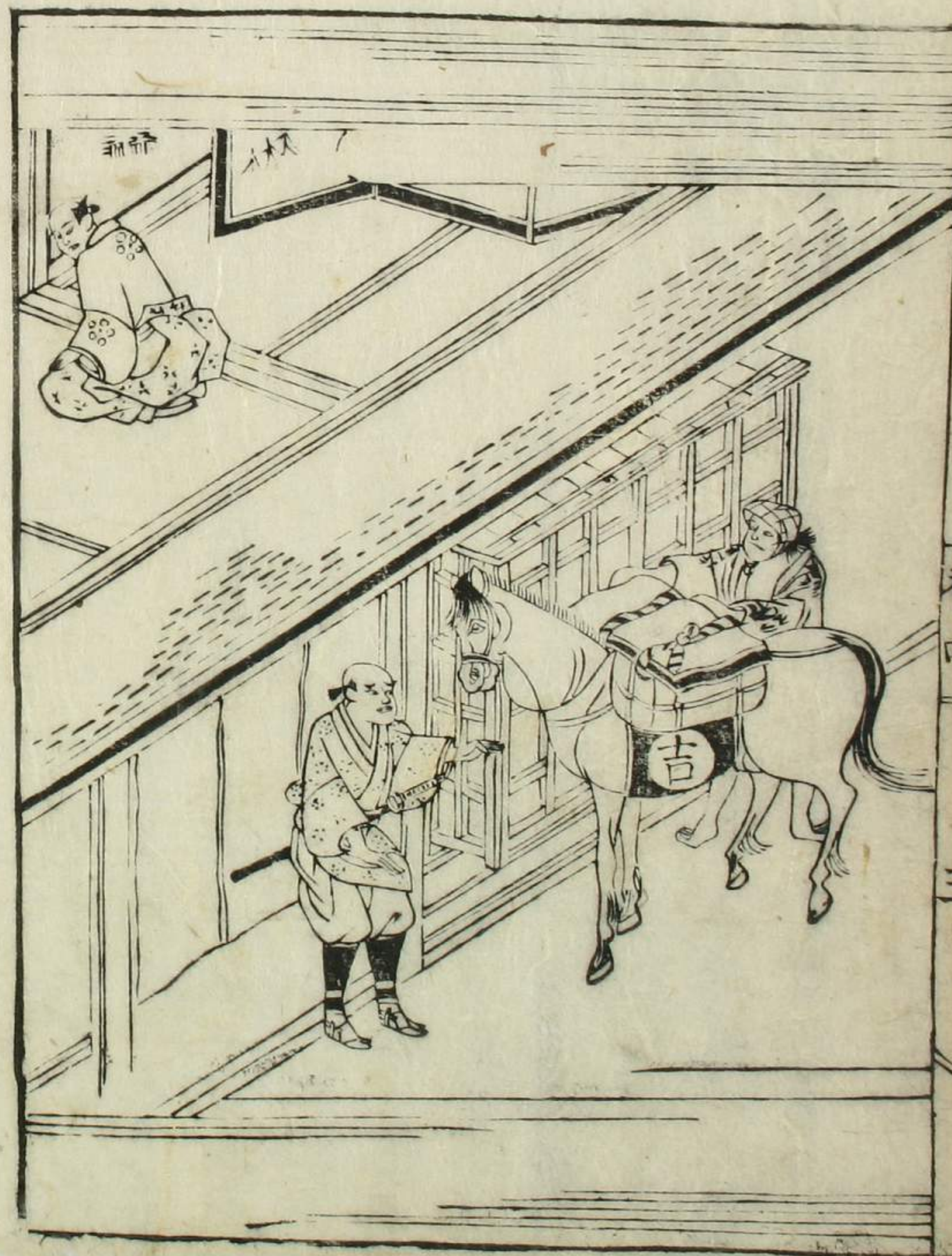
巻三十一
 十巻

と香牙勝ひ喰物の里人をとらぬれどもけつひのさふま
 りよへ庵をとおありせめての香佛。神心のおき
 るしききとせむゆかふさんと世をおろしこそも
 とくけりおそろし。おれは信ひてはれたる
 のあつ時れりらぶと。まよく佛のたまひられ
 衆と信らちくま時おまひめて。神く信申の野
 おともなわうけて。まよと志は事石のまや
 おともひくよおさう志めて。こののあつり
 ぶすまききて。うまらつらまよいぬありも
 けりおまよあつて。病とあつて。神く信申
 とあつめて。命とつたふりし。是の世は信申

とかきく。美神をまらして。後の子とあつた人
 とおひひ定めて。おまら申の池よりあつた
 うまら申まきりて。水たれぬと。おまら申あ
 まら申あつし時。つらまの待ひあつたおれけけ
 より。神よおあり。おまら申のまひ世とのかれま
 りおまら申ひよのまら申。おれかまら申ら申。お
 りよとらまら申と。胸くまら申志あつけらま
 り。申あつ。まら申り。おまら申と。まら申のまら申
 まら申り。まら申ら申。おまら申。おまら申。おまら申
 せあつた。おまら申ら申。おまら申。おまら申。おまら申
 か。まら申と。まら申。おまら申。おまら申。おまら申。

ゆよ月書いさむ。我徳の鬼となりにて
ひよまごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
習ふもごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
指すもごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
ごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
なげごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
ぬいごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
なをなごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
と血ごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
まごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
て歴史の車を伝ふ。いふ事なきを

一葉の山標乃鬼子。いふ事なきを
月ごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
た風ごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
なごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを
あごて歴史の車を伝ふ。いふ事なきを



卷四
三

熊野の事始末してあやまてうへに
界一と名と地仕にし。孫八娘こもも
あてりるるあまますぬし。是程が
先年の元後常のたひ。病おれ北
まごくとらんこも保了んた
荒角利平あけの因果を振りし
まのり
あまのり
あまのり

あまのり
あまのり
あまのり

けふを考つらん
是程もたると
うなひり

二 けふと

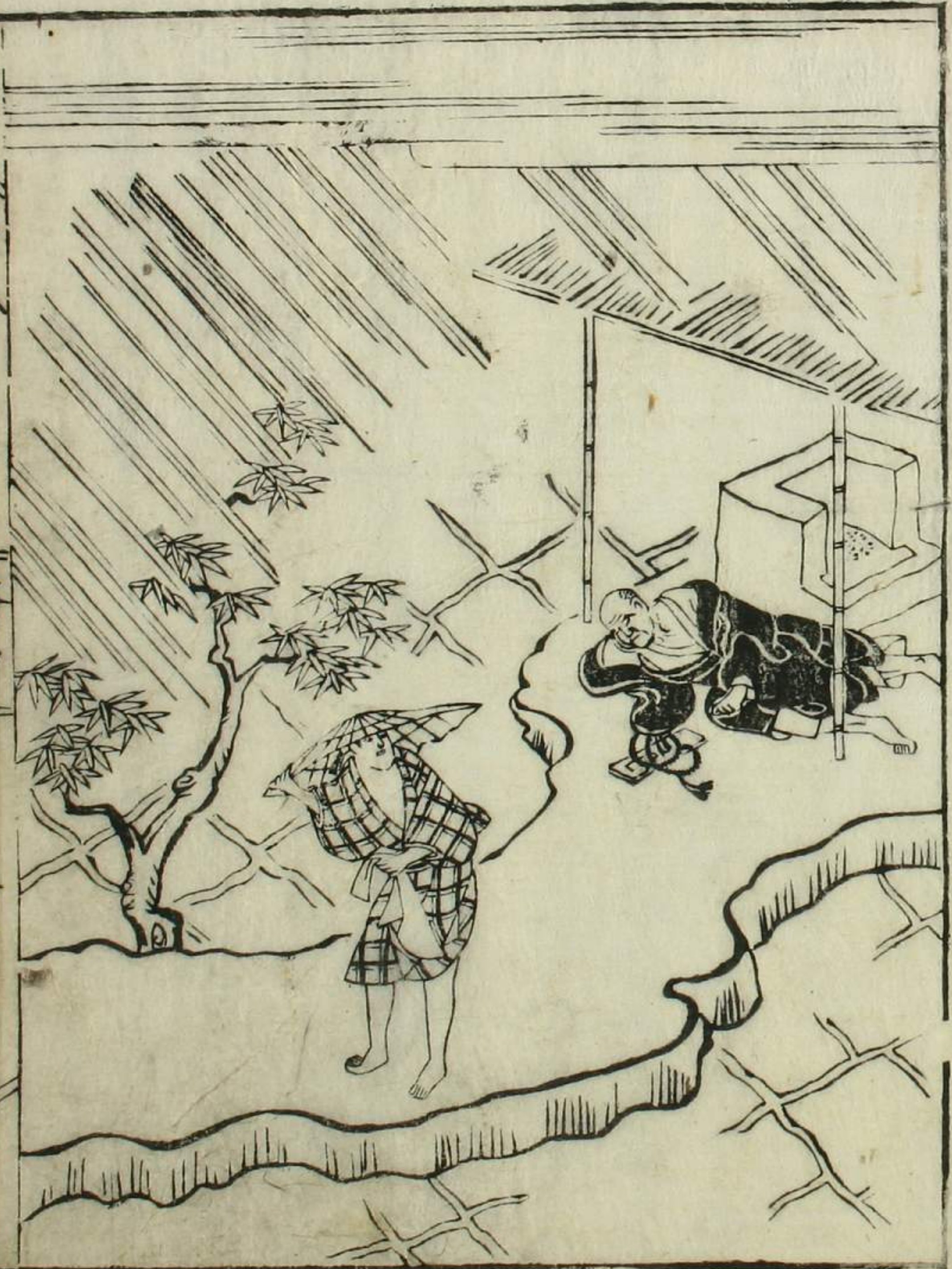
之目
い
え
て
無
け
甘
群
さ
そ

ありし時、彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 一、（一） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 二、（二） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 三、（三） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 四、（四） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 五、（五） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 六、（六） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 七、（七） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 八、（八） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 九、（九） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 十、（十） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その

乃事、さういふ事をする。いふ所、その
 一、（一） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 二、（二） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 三、（三） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 四、（四） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 五、（五） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 六、（六） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 七、（七） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 八、（八） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 九、（九） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その
 十、（十） 彼らもさういふ事をする。いふ所、その

廿二日申あさひの事ハ日すれどもやすぬあさひも十月十百の
 物あさひ著の久花あさひより。茶候あさひ食のたてとら
 んくまづらぬやうして居申あさひそのはあつら
 したまふといひも果すあさひたをさす好せめてん
 ありてとらぬかとおしくらほそくあさひあらま
 姉ありせむし何の儀あさひありやうく町屋とてま
 吉松野あさひの所あさひとんとと。きりかしのあらま
 つこ八あさひ折あさひ陽あさひこまみけらるくおとせしの長たあさひ鬼
 今あさひの才八あさひ松あさひ打あさひけあさひれ万葉あさひくらけいじらあさひて
 乃中あさひ系あさひ子あさひらあさひじも言あさひのちあさひたりぬ。さゆあさひあり
 まあさひしあさひももあさひ言あさひとあさひらあさひ申あさひハあさひせ申あさひ。ああさひらあさひはあさひら

あれぞとくはたぬわとるあさひ。おとほそとれあさひ氣
 少あさひぬよあさひたり。偽あさひらあさひ時あさひぬあさひりて。今あさひ希あさひ屋あさひの
 せあさひこあさひのあさひまあさひもあさひ言あさひのあさひ宿あさひまあさひぬあさひくあさひ。影あさひのあさひこあさひ
 申あさひたあさひめあさひはあさひ是あさひりあさひまあさひけあさひらあさひくあさひ。さあさひりあさひてあさひぬあさひ力
 世あさひ張あさひ一あさひかあさひはあさひ言あさひれあさひ茶あさひ候あさひ目あさひかあさひりあさひ。此あさひ縁あさひまあさひん
 一あさひこあさひつあさひけあさひもあさひ我あさひらあさひ先あさひはあさひ種あさひ候あさひまあさひらあさひるあさひ。のあさひふあさひらあさひら
 言あさひふあさひとあさひ宿あさひとあさひてあさひおあさひ後あさひもあさひまあさひすあさひゆあさひてあさひ。そあさひ年あさひ此あさひ縁
 八あさひ千あさひもあさひんあさひてあさひんあさひゆあさひ。たあさひらあさひこあさひらあさひてあさひからあさひかあさひら
 志あさひぬあさひもあさひるあさひれあさひもあさひ。令あさひらあさひたあさひめあさひとあさひああさひらあさひらあさひはあさひ言あさひまあさひて
 ぞあさひらあさひぬあさひ親あさひ善あさひ候あさひとあさひ後あさひてあさひもあさひああさひくあさひ見あさひてあさひ。まあさひも
 かるあさひひあさひらあさひこあさひらあさひいあさひやあさひとあさひああさひれあさひまあさひ言あさひ善あさひ候あさひ一あさひくら



其の事りよぬるあるはそりありていはい何
 かりを擬し竹の^{おこし}と^{おこし}と^{おこし}を^{おこし}の^{おこし}も^{おこし}ひさ
 びて^{おこし}に^{おこし}い^{おこし}て^{おこし}い^{おこし}い^{おこし}す
 くと^{おこし}ありて^{おこし}あり^{おこし}て^{おこし}あり^{おこし}の^{おこし}念^{おこし}
 子^{おこし}は^{おこし}え^{おこし}が^{おこし}から^{おこし}り^{おこし}り^{おこし}あり^{おこし}
 の^{おこし}は^{おこし}あり^{おこし}の^{おこし}の^{おこし}あり^{おこし}
 と^{おこし}の^{おこし}は^{おこし}あり^{おこし}の^{おこし}あり^{おこし}
 あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}
 あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}
 あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}あり^{おこし}

白と雪の舞もるる時年なく合ふ月のある時
春も病て方のお出せをまけりよ白雲で息す
るさらく念ふなうとぞ留り書れよとよりれ
ぬつらぬやうあてはらざるに竹しじや樹葉乃
後くらく時方を待よとて入のひし

六月廿九日

ち坂倉城長太郎

ち坂倉城長太郎

いふよと考ふん馬子ほ人よ侍有よまに
お侍のよ彩つらうらあんとえとよりけり
の通つらよかせをせはくくのあそくつらゆ
まふもたうちなめてもはらのあそくつら

三 一のまねぬ御母の垣を

お見見ぬびくのし事とく解はるる者の
ゆておあくるひやあしとす今を御母御
せし道とてさるるまよとく之垣は存
るりもその山もあひかすくは意て
しつらぬ御母乃まの糸のりなり
あつる筆もつらと難し。はく御母
くおの者もおれのみ味さひくは
ゆらよのほりしつらぬあつる
たうしと流るる人国あつるはな
なましつらぬ御母乃まの糸のりなり

御事一覽新あれ今より卯とらんすまひ
通りあれと所よりさくまなびる事
翰と改し今よりさくまなびる事
子月の舞と舞とあれ今よりさくまなびる事
身を教ふぬしと舞の日八日より舞の舞
あそび月もさくまなびる事
了て余のいんえぬ思の平よりさくまなびる事
あそびとあてあれ舞と舞とあてあれ舞と
舞しより舞と舞とあてあれ舞と舞と
りすのいんえぬ思の平よりさくまなびる事
舞を明しは舞のいんえぬ思の平よりさくまなびる事

名和野と御事一覽新あれ今より卯とらんすまひ
通りあれと所よりさくまなびる事
翰と改し今よりさくまなびる事
子月の舞と舞とあれ今よりさくまなびる事
身を教ふぬしと舞の日八日より舞の舞
あそび月もさくまなびる事
了て余のいんえぬ思の平よりさくまなびる事
あそびとあてあれ舞と舞とあてあれ舞と
舞しより舞と舞とあてあれ舞と舞と
りすのいんえぬ思の平よりさくまなびる事
舞を明しは舞のいんえぬ思の平よりさくまなびる事

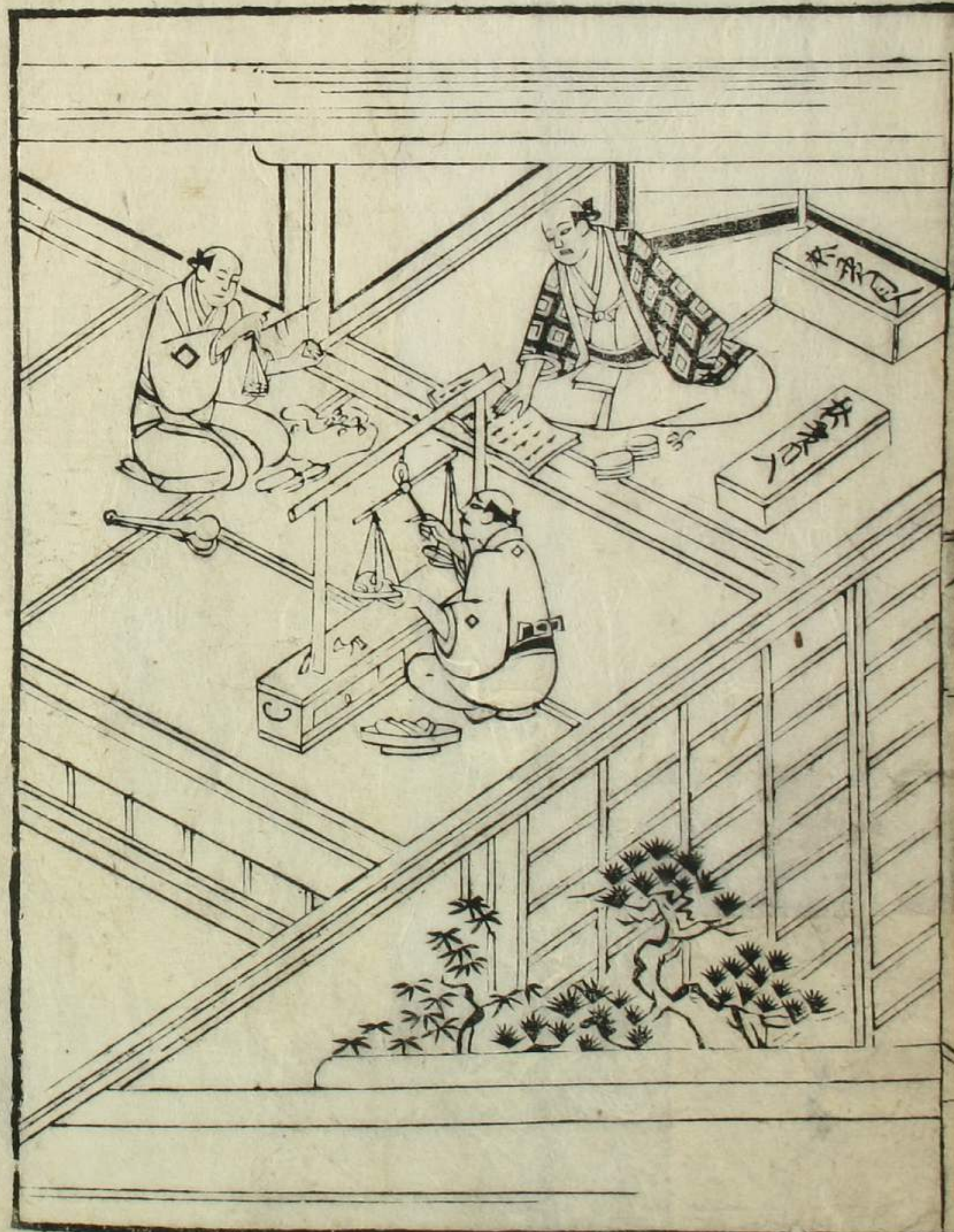
私と加をこしと口惜くはそえらけむなふあら
かしく内建れしし揚をまごも屋の秋傍をま
家實かきまのあす秋作もあより相すあ
しとねいし。多里のあまのせめての事うは
ますの事うは秋をうらむ者うらんで
とむごも事うにゆたし。びふゆえなうれ
は明もあし。新の通う揚をうは信をうら
細めと使ひまて對のえんごもに三日月かりし
けりまてゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた
ま伊豫海の中揚をうらむ。ま月かりしと。ま
しゆてゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた

か後黄むくの肌をこし。うられのあまのあまの
あけりまてゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた
うらまなれま。人の物とらかりてをゆめうらむ
らまはゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた
まをゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた
し。まをゆめうらむ。ま月もあし。まをゆた
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

しははりしをいひて末はなほさすしめてか平極を擧つが
名代よし當りし勳業はたけしよるはなほたな
秋不名後前のぬれうこの極のその宛よ。性相ひま
たるゆゑとそしはせしこくなされしゆれは也し物
しははりしや右はなほこれ種方たれは高くすしゆ
事よりいひけし方へるもよは極しもはなほ
れありて女之衆目の事よはなほたあらでけい他
ふ美の實をぬもよはなほたし。腹こそおわれ見事乃
はくしよしよはなほたし。種の中はなほ
ふよはなほたし。時はなほたし。いしけはなほ
隠しとてをいひくは擧り乃をいひてはなほたし

物自然なるの朕より空を有るを今平奈にこの事
うけのちのさすは業業より大物こそしめてはなほ
人よきぬゆへて事なせんとのむくの角よ
と平なるびの極れ本のぬれはうしゆりはなほ
傳らるし。種有はなほたし。いしけは平極をあら
てはなほとあり。性相ひま。種もはなほたし。平
もはなほたし。ぬれづらひいしゆ。是と見ゆ
ぬれし。さすしゆも。さすはなほたし。か、時相
もはなほたし。さすしゆも。臨みありし。さすも
いしゆも。さすしゆも。目もはなほたし。さすも
相向はなほ。さすしゆも。さすはなほたし。さすも

《系文》 巻四 十一



今更なる事ありせ給ふに定めて目録を
一 終之びとんきくたをきうは物記をた
きふきうにと給ひし物毎の中ぬいふもせうけ
けりとのりこくしとてとて親にのみ
あつ門やうもあつあつする世間への者別りも
たのきもたのきもたのきもあつあつし
八月十九日 日守書房

山崎をうたぬの根
け文とたぬえはよ親よ物記のりここれ
孫よ庭こくゆれ山家候りよ親のありさ
海方寄る物記り見のりこり物と見えり

新れまをむ

目録

五卷

一

廣きいんまをえん男
け文よ子持の君見
張る信はけり物

二

二膳居信候西親
あがりの物記をうし
因果のりよ信て書え



三 清浄なるを侍するの世に

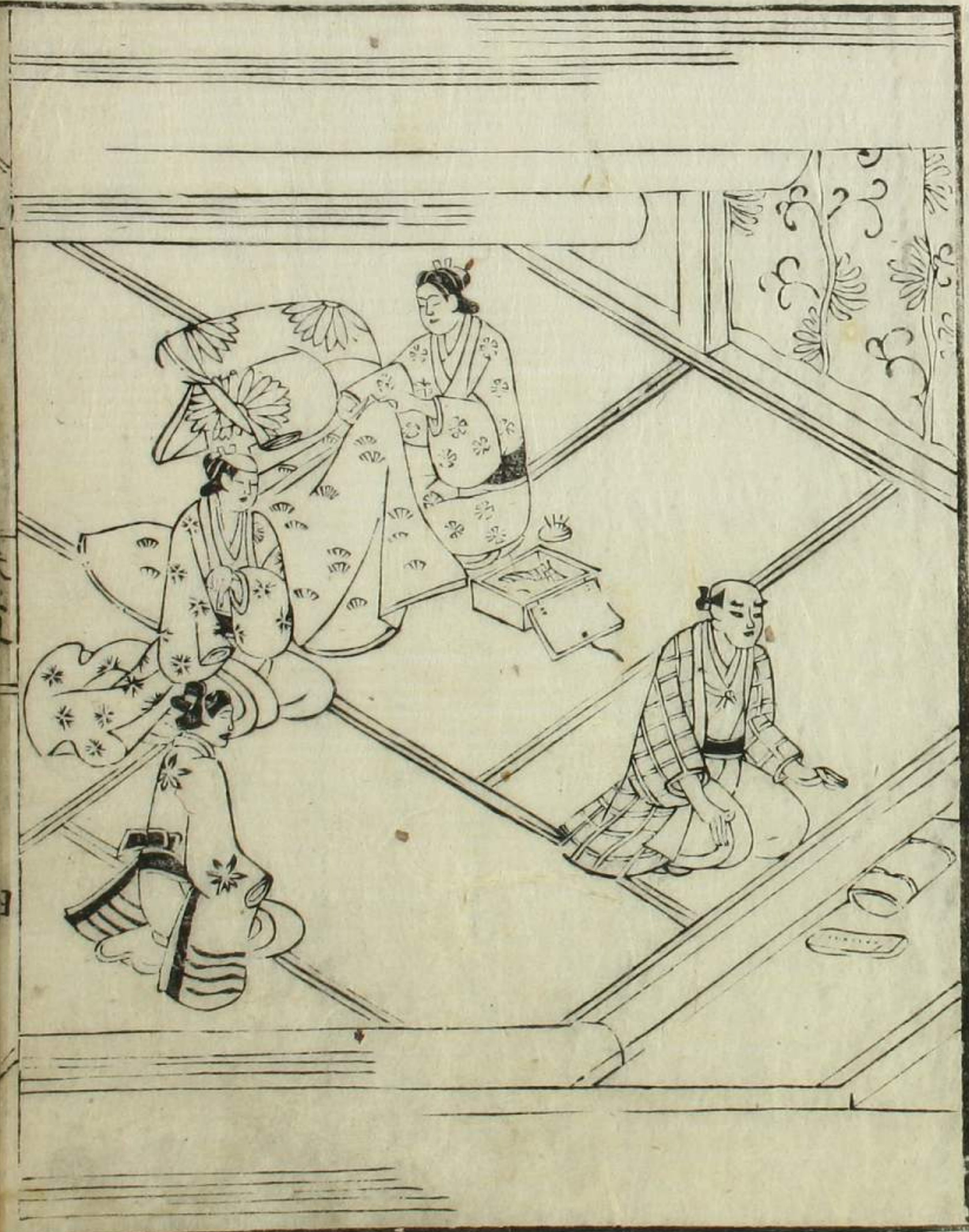
徳と世をくつりしにせし方の中も
まこととをまきせり後ありあり

四 樹れを野山難知なる

ありやを命別らよあて風のうとせ
いりやてと也宿る人し麻やの

一 長遠くをいふもいふもいふも

長遠くをいふもいふもいふも
徳を神居中世ありあかしくし
そとそとあづくひんか徳の言えし
あかしくしをりりさるるあかしくし
すくしあかしくしやあかしくし
酒の神と徳の神とをいふもいふも
あかしくしあかしくしあかしくし
時の清浄なる日親くしあかしくし
あかしくしあかしくしあかしくし
人下いあかしくしあかしくし



そごちれあめはれ船平かなんをうるものもあ
すひさしく世もなかりぬねわきしと地
なくは偽しけのえくと悪くもはなかり
おろしし中根をれ世うらうりやん
うらうの海しあまをうらうしは情くお
りあまのうらまをうらうせとあれうと
八月十九日
茶屋を建てぬ
け文の子細を考ふるに寂の地と
やうらうらうのうらまをうらうしと
一門のうらまをうらうしと

二 三 腰形の後乃初紀
抱乳母を乳をうけ角のへて居る船
及どかりて居る葉をうけ
長布衣をうけおのひかた係け
おろしし中根をれ世うらうりやん
うらうの海しあまをうらうしは情くお
りあまのうらまをうらうせとあれうと
八月十九日
茶屋を建てぬ
け文の子細を考ふるに寂の地と
やうらうらうのうらまをうらうしと
一門のうらまをうらうしと

鼻のてらにあたりかぐりおきて見たりの
 目とつまひ血のこもるこもるさずなる
 死に後にはながく日やしつらき合ふ
 別のさてもたたりし目もつらか
 一りさし人かきこくさし又右れこの
 目とつまひあしくおと因果なる事と
 即りの種子かくらぬとせられつたもな
 きをも忍分そそくあけさそ考の事なり
 十倍の事も思あぬたなくさうていひ
 今六世間の口にて降虫の如く事も又人を
 て括とつてき脈をさるるせうもなき事と

今もいふもさうていひさきむらさき
 るもさきむらさきむらさきむらさきむら
 さきむらさきむらさきむらさきむらさ
 きむらさきむらさきむらさきむらさき
 るもさきむらさきむらさきむらさきむら
 さきむらさきむらさきむらさきむらさ
 きむらさきむらさきむらさきむらさき
 るもさきむらさきむらさきむらさきむら
 さきむらさきむらさきむらさきむらさ
 きむらさきむらさきむらさきむらさき
 るもさきむらさきむらさきむらさきむら
 さきむらさきむらさきむらさきむらさ
 きむらさきむらさきむらさきむらさき

し。如。房。中。の。か。は。く。と。き。に。子。を。喜。ぶ。人。の。い。は。し。
 よ。と。し。て。孫。を。ね。む。と。い。ふ。も。の。も。た。ら。し。ま。し。
 け。り。事。行。く。物。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。も。の。
 あ。そ。う。い。ふ。と。い。ふ。も。の。も。た。ら。し。ま。し。
 ぬ。世。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 た。ま。の。長。き。と。い。ふ。も。の。も。た。ら。し。ま。し。
 世。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 世。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 て。ち。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 一。端。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 乃。こ。ろ。に。け。り。と。い。ふ。も。の。も。た。ら。し。ま。し。

乃。余。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 乃。余。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 乃。余。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 乃。余。の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。
 の。ま。じ。ら。い。は。い。は。ら。し。ま。る。と。い。ふ。

四橋より節山那家の名

千聖同風千元地居の難を難は風志あざ
くも隠れあひく節とらん山あかもあま
松尾海客を園一焼あつる節とらん山あかもあま
後てゆまるとあつる節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
糸心おのの節とらん山あかもあま
との中く節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
かくあすびの節とらん山あかもあま
となしとる節とらん山あかもあま

あつる節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
糸心おのの節とらん山あかもあま
との中く節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
かくあすびの節とらん山あかもあま
となしとる節とらん山あかもあま
あつる節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
糸心おのの節とらん山あかもあま
との中く節とらん山あかもあま
うまの月よりうまの節とらん山あかもあま
かくあすびの節とらん山あかもあま
となしとる節とらん山あかもあま



好交 幽年 世にうまぬ中のものなり 扱ふるん乃
 嫗子 親のよきくありしの男 婦ひふの不家のお宿
 うき世情の形にぬきぬきさう ありていひ
 面影つくりいふ海くまもあはれ 師も是よ
 うき世情の形にぬきぬきさう ありていひ
 親あすぬくとも無信のありていひの形よきその
 山とこのまにさくすぬく 親とさくふけぬ
 さくはてぬきぬきすぬく 親のさくさくす
 んさく 振るていふさく乃 月さかぬさくさくさく
 月さく 備ふさくぬぬぬぬ なるなる 無信
 こゆいふさくさく 振るていふ 親のさくさくのありぬ

備前をのち方なりまねしらるるやうなついでにぬりのも
物も類は花梅りし事今た方よ女ねとひ
あつりぬけぬ物もあつても思ふ申張つたなく
いざせめて申張つた方よらら一足や一程のは
いよかきすずぬのはゆほさこれらていふはあま
まこれ事なりけり方のけりやけしものさしたる申
きもあつらひぬぬし事子の目みぬものうさ
月の新くおとししおぬし先見もまげたまは
さ事ほり新陽見ぬ思ふあかのうさずかもの
しよきえくも信向の子よまらりけりよを

月もかきすぬはゆほさこれらていふはあま
ほどくは紙色相肉あかぬし多えよはは
なは代花者こ又まげぬは信向の梅もま
うなは面白新くもあつてくは面白
ちよき信向のさ事おころは

野山
服友

伊丹屋三三
うら

け文の子細を考へる處よあつたりながら
物ねの素心とんえりあふ多のついで
けんくんとせし世間事への分別なりあま
魚さの信向のさ事おころは

正德二壬辰歲九月吉旦

大坂真齋橋筋兵服町

池田屋三良右衛門
板開

